

『マクベス』の TLN 75-76 について

山田直道

W. シェイクスピアのいわゆる四大悲劇の一つである『マクベス』の現存する信頼すべき底本は唯一 1623 年にシェイクスピアの元劇団仲間二人が出版した第 1 フォリオのものであり、全体の行数で 2108 行⁽¹⁾と全劇作品のなかで 3 番目⁽²⁾に短い。宮廷での上演用ないしは縮約のためというのが現在のところ考えられている短さの理由だが、特に指摘されている一幕二場⁽³⁾の縮約説⁽⁴⁾の一つにスコットランドを侵略するノルウェー王にコーダーの領主が手を貸し、ダンカン王を裏切ったとロスが報告する場面がある――

King. Whence cam'st thou, worthy *Thane*?

Rosse. From Fiffe, great King,

Where the Norweyan Banners flowt the Skie,
And fanne our people cold.

Norway himselfe, with terrible numbers,
Assisted by that most disloyall Traytor,

The *Thane* of Cawdor, began a dismal Conflict,

Till that *Bellona's* Bridegroome, lapt in prooffe,

Confronted him with selfe-comparisons,

Point against Point, rebellious Arme 'gainst Arme,

Curbing his lauish spirit: and to conclude,

The Victorie fell on vs. (TLN 72-83)⁽⁵⁾

そして、カットのため一幕二場 TLN 75-76 の韻律と行配列が乱れたとして、行を整えた上で、ドーヴァー・ウィルソンは「秘密裡に」(‘in secret wise’)を⁽⁶⁾、グレッグは「今では周知のことだが」(‘and, as now is known,’)又は「密かに」(‘and in secrecy’)を⁽⁷⁾、‘numbers,’に続けて付加すべきであると提案している。しかしそうなればこれは単に韻律や行配列の問題にとどまらず、コーダーがノルウェー側についていたことをマクベスは知らなかったことを示そうとする内容の問題でもある。こうして、コーダーに関するこの箇所は、一幕から三幕にかけて短い行が多く見られる『マクベス』には筋書の首尾一貫をも曖昧にする縮約、他人の筆による校訂があるのではないかとする推測⁽⁸⁾に根拠を与える好例ともなっている。

そこで、ウィルソンやグレッグの考え方を少し詳しく検証してみよう。ロスの報告は、コーダーがノルウェー側につきマクベスと戦ったことを含意するため、次の場面でコーダーの

ここでシェイクスピアは、コーダーがノルウェー軍と結託しただけでなく、反乱者マクドナルドを密かに援助し、あるいは両者と共に国家の転覆を図った可能性をも創造して、反逆の共謀者を拡大し罪の重さを強調していると言えよう。このように人物ロス、アンガスを創造し、ロスに‘that most disloyall Traytor,/The *Thane* of Cawdor,’と言わせてコーダーとノルウェー王の同盟関係を創造し、アンガスにはコーダーとマクドナルドとの関係さえも匂わせてコーダーの更に重い反逆罪を創造することによって、主典拠のホリンシェッドから離れ、シェイクスピアはダンカン王を裏切ったコーダー像を創造していると言えよう。

それでは、こうした明瞭な反逆者コーダーを創造した作者の意図はどのようなものなのであろうか。そして、その意図と、韻律と行の不整合を矯し劇のアクションの矛盾を解消するために「密かに」の意味合いを「復活」させることとの間には、どのような関係が生じるだろうか。上で述べた通り、ホリンシェッドでは、そもそも逆臣コーダーは反乱者や侵略者との関係も持たず、ただダンカン王に対して企てた反逆で断罪されたことだけが記述されている。「密かに」どころかスコットランドの内憂外患とコーダーとは全く無関係なのであり、「密かに」自体がホリンシェッドから遠く離れた創意というほかはない。果たしてシェイクスピアには、マクベスがコーダーの寝返りを知らずに戦ったことを示すために、後のアンガスの台詞では遅すぎるとして、ロスの台詞に「秘密裡に」や「密かに」と「書く」以外に方法はなかったのだろうか。

同じ一幕二場の冒頭、血まみれの将校 (a bleeding Captaine) が登場したとき、ダンカンは目ざとく将校の目的を見抜く――

King. What bloody man is that? he can report,
As seemeth by his plight, of the Reuolt
The newest state. (TLN 18-20)

又、ダンカンの長子マルカムもすぐにその将校を目下の状況説明にふさわしい信頼のおける味方であることを証言し、発言を促す――

Mal. ...
Say to the King, the knowledge of the Broyle,
As thou didst leau it. (TLN 24-25)

この将校はホリンシェッドの記述には登場しないシェイクスピアの創造人物であるが、混沌とした最新の戦況――マクドナルドの反乱とマクベスによる鎮圧、それに続くノルウェー王の侵略とマクベスとバンクオウの奮戦――をダンカンに報告する。そしてこの中で、ホリンシェッドより遥かに手強い相手が立て続けに反乱、侵略を仕掛けるよう変更され、それを鎮圧し阻止しようとするマクベスとバンクオウの勇敢な戦いの当事者ぶりが臨場感たっぷりに創造されるのである。しかし、このように戦場から抜け出たばかりの負傷した姿で国王に報告する将校は、マクドナルドとマクベスの直接対決とマクベスの勝利、ノルウェー王の新たな攻撃とマクベスとバンクオウの猛反撃に言及するのみで、コーダーがノルウェー王と組

んだこと、ひいてはマクドナルドを密かに助けたことには触れずじまいである。将校はマクドナルドやノルウェー王を相手に息つく間もなく戦闘中に離脱し生々しく報告するのであり、彼の報告に見えるマクベスも恐らくはその将校と同じ状況ではなかっただろう。従って、シェイクスピアが血まみれの将校を創造する意図は、戦いの当事者というなら血煙を上げる刀を振り回し血の海を泳ぎゴルゴタの丘を築くマクベスも将校と同じであり、コーダーが敵側についていることはそうした状況下では両者とも知らなかったことを示すことであろう。そして一幕三場、戦場を去り魔女の挨拶を受けた直後にアンガスによって初めてコーダーの反逆を知らされ、衝撃と驚きとがマクベスを襲うことになるのである。

再びここで冒頭で引いたロスの台詞に戻ることにしよう。79行目以下で、マクベスは鎧に身を固めノルウェー王に立ち向かい斬り結び、奢れる敵の氣勢を制し勝利を収めた様子が報告されるが、相手はノルウェー王とそれを助けたコーダーを指す them ではなくノルウェー王を指す 'him' や 'his' であり、このことは、少なくともマクベスが直接戦った人物にコーダーは含まれず、眼前の敵はノルウェー王であったことを示している。

このように、血まみれの将校による戦闘の現場報告やマクベスが直接戦った相手はノルウェー王であったとするロスの報告を創造することで、必ずしも「秘密裡に」や「密かに」を意味する半行を補わなくとも、マクベスはアンガスによって伝えられるまでコーダーの反逆を知らなかったとする筋書に矛盾は生じないであろう。ダンカンが主導し、機略中心の三段階にわたる反乱・侵略鎮定のなかで臣下として働いたホリンシェッドのマクベスと比較すれば、シェイクスピアがマクドナルドとノルウェー王だけを相手に獅子奮迅戦うマクベス像を前景化し明瞭に創造していることは明らかである。そしてその働きの見返りにマクベスはコーダーの領主となったのであるが、コーダーがノルウェー王を陰で助けていたことを知らなかったわけであるから、コーダーの領主の地位が欲しくて戦ったわけでは勿論ない。従ってマクベスは図らずもコーダーの領主になったことになろう。ではそれは誰が意図したのであるだろうか。当然、作者のシェイクスピアということになろう。ホリンシェッドを逸脱し、コーダーがマクドナルドとノルウェー王の反乱と侵略に加担した罪を創造し、それに立ち向かったマクベスに勝利を収めさせコーダーの領主にしたのはシェイクスピアなのである。即ち、マクベスは図らずも反逆者コーダーになるよう作者の意図にしたがって創造された主人公となり、シェイクスピアは、戦功の報奨を反逆者コーダーの地位とする意図がマクベスに気づかれないよう注意深く作劇したとも言えよう。まさにダンカンの言う「コーダーが失ったものをマクベスが手に入れた」結果なのだ。だが、それは魔女の言う、「戦いの決着がついたとき」でもあった⁽¹⁴⁾。

「密かに」は作者にとって間違いなく必要な状況である。韻律、行配列、劇のアクションのどれをとっても、TLN 75-76には「密かに」のカットを想定する誘惑を感じないわけにはいかない。がしかし、目前の敵にコーダーが加わっているか見極める余裕はマクベスにはないことをシェイクスピアは予め示していることもまた確かなことであろう。

注

1. Greg, W. W. *The Shakespeare First Folio*. Oxford: At the Clarendon Press, 1955. 389. 尚, E. K. Chambers は 2106 行と計算している。Cf. Chambers, E. K. *William Shakespeare*. Vol. I. Oxford: At the Clarendon Press, 1930. 471.
2. これより短い作品は, *The Comedy of Errors* (1777 行), *The Tempest* (2062 行)。尚, 行数はグレッグの上掲書 389 頁の注 1 による。
3. 第 1 フォリオ所収の『マクベス』に施されている幕場割りによる。
4. E. K. チェンバーズはこの他に, I. ii. 20, II. iii. 109, III. ii. 32, 51, III. iv. 4, IV. iii. 28, 44 の 7 箇所でもカットが考えられると言う (上掲書 471 頁)。引き続き, “Cutting and some consequential adaptation may perhaps also explain the inconsistency which has troubled editors in the accounts of Cawdor in i. 2, 3, ... (同 472 頁) と論ずる。
5. Charlton Hinman が *The Norton Facsimile: The First Folio of Shakespeare* (1968) で用いた Through Line Numbers システムにもとづく行数。本稿では同第 2 版 (1996) を使用。尚, 引用文中の longs は現代綴化した。
6. Wilson, J. Dover, ed. *Macbeth*. Cambridge: Cambridge University Press, 1947. xxvi.
7. グレッグ, 上掲書 396 頁, Note B.
8. ウィルソン, 上掲書 xxiv-xxvi. これに対し, 「コーダーの反逆」は時事的に過ぎ検閲との関連でカットされたとする意見 (Nosworthy, J. M. *Shakespeare's Occasional Plays*. London: Arnold, 1965. 23) や, 韻律や配行の不整合も劇的效果を狙うシェイクスピアの筆によるとして disintegration を否定する意見 (Flatter, Richard. *Shakespeare's Producing Hand*. London: Heinemann, 1948.) 等がある。尚, 最近では三幕五場と四幕一場のヘカティの場とその場で歌われる二つの歌にテキスト編纂者の関心が集まっている。
9. ウィルソン, 上掲書 xxv ff.
10. グレッグ, 上掲書 390 頁。
11. グレッグ, 上掲書 389 頁。
12. *Holinshed's Chronicles of England, Scotland, and Ireland*. Vol. V. New York: AMS, 1965. 269.
13. Muir, Kenneth, ed. *Macbeth*. London: Methuen, 1965. 9 の注, 及び, Braunmuller, A. R., ed. *Macbeth*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997. 108 の注参照。そのなかで, この事実はそれぞれ指摘されているが, ウィルソンやグレッグの所論及びシェイクスピアの複雑な筋書の操作に対する言及はない。
14. この点に関しては更にソースと作品との全編的な比較検討が必要であり, 稿を改めなければならない。